包含と排除
——『骨董店』における「同情」のメカニズム

玉　井　史　絵

序

『骨董店』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41) のヒロインであるネル・トレントの死に対する，同時代の読者の過度に感傷的な反応は，あまりにも有名である．ディケンズの親友のW. C. マクレディ (W. C. Macready) は，ネルの死を描いた分冊が届いた1841年1月22日の日記に「これほどまでに痛みを与えるような言葉を，私は読んだことがない」(qtd. in Collins 99) と書き，『エディンバラ・レヴュー』(*The Edinburgh Review*) の辛口の批評家，ジェフリー卿 (Lord Jeffrey) は，「小さなネルが，ボズの小さなネルが，死んでしまったんだ」(qtd. in Andrews 27) と涙ながらに語ったという．ネルの死は，ジョージ・ヘンリー・ルイス (George Henry Lewes) の言葉を借りれば，「国民的な悲しみ」(Schlicke 64) とまで言われるような，大きな同情の渦を，人々の間に巻き起こしたのであった．

ディケンズの作品において，上のエピソードに代表されるような「同情」(sympathy) は，あまりに根幹的な要素であるがために，かえって詳細な分析の対象とはならなかった．ディケンズの作品を特徴付けるレトリックのひとつとして，これに着目したのは，ハーヴェィ・ピーター・サックスミス (Harvey Peter Sucksmith) である．彼はディケンズの小説に現れるsympathyを，受動的共感，能動的共感，憐れみの感情または同情，肯定という4つのタイプに分類し，それぞれの例を挙げている (119-40)．これらの4つの同情には細かい定義づけがあるが，その基本的要素は「他者と感情

を共有できる」能力（*OED*）であり，本論での「同情」という言葉は，この広義の意味で使用されている．サックスミスが登場人物間の共感を分析の対象としたのに対し，本論は登場人物間だけではなく，登場人物と作者，また登場人物と読者との共感をも視野に入れる．すなわち，誰に対してどのように，作者や読者は同情を感じるのか，また感じないのか，を分析するのである．「国民的な悲しみ」という言葉に代表されるように，ネルの死が同時代の読者に呼び覚ました感情は，あらゆる者を包み込んで国民を一体とする，包含的なものであった．しかしこの小説には同時に，強い排除の願望も働いている．そしてこれらの相反する願望は，同情の対象であるネルと，恐怖と嫌悪の対象であるダニエル・クウィルプという，2人の登場人物の描写に最も端的に現れている．本論では，ヴィクトリア朝における同情の社会的機能とそのメカニズムについて考察した後，この2人に焦点を当て，「同情」に隠された包含と排除の構図を分析する．

Ⅰ．「同情」の社会的機能

ヴィクトリア朝における同情の社会的機能について考える際，19世紀の都市風景の中に出現した「群集」の存在を無視することはできない．

> Night is generally my time for walking. In the summer I often leave home early in the morning, and roam about fields and lanes all day, or even escape for days or weeks together, but saving in the country I seldom go out until after dark, though, Heaven be thanked, I love its light and feel the cheerfulness it sheds upon the earth, as much as any creature living.
>
> I have fallen insensibly into this habit, both because it favours my infirmity and because it affords me greater opportunity of speculating on the characters and occupations of those who fill the streets. (7)

マスター・ハンフリーによる，この『骨董店』の有名な冒頭の語りでは，昼と夜，光と暗がり，田園と都市が対比されている．光が大地に降り注ぐ田園風景を愛する語り手が，今眼差しを向ける暗がりの中の「通りを埋めつくす人々」は，都市風景の主要な構成要素である．パム・モリス（Pam Morris）は，18 世紀から 19 世紀にかけて国家の主権が，領土と結びついた権力から人民へと移行するにつれて，国家表象のあり方も，広がりや開放的な空間によって視覚化された田園風景から，人々が狭い空間の中でひしめき合う都市風景へと変化していったと述べている（10-11）．『骨董店』の冒頭の語りは，まさにこうした変化を反映しているといってよい．

だが，急激な都市化にともなって現れた群集に対して，当時の批評家や作家の反応は否定的なものであったと，ヴァルター・ベンヤミン（Walter Benjamin）は指摘している．彼らにとって群集とは，「どこか不気味なもの」だった．「大都市の群集が，それをはじめて直視した人々のうちに呼び起こしたのは，不安，嫌悪感，そして恐怖だった」（170）のである．フリードリッヒ・エンゲルス（Friedrich Engels）は『イギリスにおける労働階級の状態』（*The Condition of the Working Class in England*, 1845）で，街路の雑踏には「何か嫌悪を催させるもの」があると言っている．彼が嫌悪の感情を抱いたのは，巨大な群集のひとりひとりが互いに無関心な状態で存在しているという事実であった．

> There is something distasteful about the very bustle of the streets, something that is abhorrent to human nature itself. Hundreds of thousands of people of all classes and ranks of society jostle past one another; are they not all human beings with the same characteristics and potentialities, equally interested in the pursuit of happiness? . . . . And yet they rush past one another as if they had nothing in common or were in no way associated with one another. . . . No one even

bothers to spare a glance for the others. (qtd. in Benjamin 163)

群集の大多数を支配する無関心のなかにあって，ベンヤミンが「遊歩者」と呼ぶ人間は，群集のなかの個の存在に目を向ける．ボードレールが「通りすがりの女」に一瞬の眼差しを向けたように，遊歩者は群集の「残酷な無関心」(Engels, qtd. in Benjamin163) に逆らって，群集を構成する個人に関心を抱くのである．「通りを埋めつくす人々の性格や生業に思いをめぐらす」ハンフリーは，ベンヤミンの言う「遊歩者」である．彼はたとえば狭い街路に住む病人が，痛みと苦しみの中で街路の足音を聞いている様を想像する．また，心の重荷を抱えて橋に佇み，入水自殺を考える人に思いを馳せる．マイケル・ホリントン (Michael Hollington) は，ディケンズにおける遊歩者の重要な要素は，「同情的な投影の能力――他者の内面に入り込むことはどのようなことかを想像する能力――」("Dickens the Flâneur" 85) であるという．群集を見つめ，そのひとりひとりの内面に潜む苦しみを理解しようとするハンフリーは，この自己を他者に投影する能力を備えている．他者の内面に入り込み，他者に同情を寄せるハンフリーは同時に，「セント・マーティンズ小路のようなところにいる病気の人のことを考えてみよ」という命令形の文章によって，読者に対して他者への同情をいざなう．遊歩者ハンフリーは，群集の無関心を越えて他者に同情し，また読者に対して同情を呼びかけるのである．

ヴィクトリア朝の小説や批評家の著作で「同情」(sympathy) という言葉は，「階級間疎外の問題を個人的，感情的レベルで解決し，相互の思いやりや普遍的人間性を確信することで社会的な差異を改善しようとする試みを表すのに使われた」(15) とオードリィ・ジャッファ (Audrey Jaffe) は論じている．エンゲルスの記述が示唆するように，階級，階層の違いはあっても，基本的に同じ人間であるはずの群集を隔てているのが無関心であるとするならば，同情はその無関心を克服して群集をひとつにする．同情し，同情

をいざなうハンフリーは，無関心のために互いにつながりを持つことができない都市の群集を，共に感じることによって結び付けようとする．世界を「大きな家族」(*Master Humphrey's Clock* 5) と呼ぶ彼の語りは，「同情」という感情を土台として，人々のひしめく都市風景のなかに新しい共同体を想像(イマジン)しようとする試みなのである．

「同情」は，同時代の批評家たちが『骨董店』を批評する際に好んで用いた言葉である．A. P. ピーボディ (A. P. Peabody) は 1842 年の『クリスチャン・イグザミナー』(*The Christian Examiner*) に，「彼はあらゆる姿の人間に，どんなに身分が低く，卑しくとも，そのようなものとして心からの同情を抱いている」(16) と書き，コーネリウス・C. フェルトン (Cornelius C. Felton) は 1843 年の『ノース・アメリカン・レビュー』(*The North American Review*) に，「ディケンズは人間の苦しみの知識からだけではなく，人々の嘆きへの深い感覚と，彼らへの強い同情の念から書いている」(215) と述べた．さらにこれらの批評家は，ディケンズの人々への同情の念は，読者へと伝播し，社会の分断を解決して人々を互いに結びつけると論じた．ピーボディは次のように述べる．

> [Dickens] has nobly stepped in as the mediator between man and his brother. He brings forth the unpitied and the forgotten, yea, the erring and sin-stricken, and forces them upon the sympathy of those, who till now had passed by them on the other side. (16)

またフェルトンも同じく，次のように書いている．

> [T]he man of genius, who throws himself into the broad current of human sympathies . . . speaks to [his contemporaries] in manly tones of their duties to each other, and teaches them, that the poorest outcast, the most abject and friendless being, that ever passed through

want and beggary to an unhonored grave, is still one of the universal brotherhood of man, as much as the haughtiest in the land. (216)

ディケンズは「人とその兄弟の仲介者」として，また「人間の同情の大きな潮流に自らを投じた」者として，「哀れみをかけられなかった者や忘れ去られた者」，「貧しき見捨てられた者や最も卑しく友なき存在」を，人々の同情の対象とする．ディケンズは，人々を無関心から呼び覚まし，階級の壁を越えてあらゆる人々が「万人の兄弟」であるという意識を，読者のなかに芽生えさせたのである．同情を基礎に人々を結び付け，新しい共同体を構築しようとするハンフリーの呼びかけは，同時代の批評を見る限り，読者に届いたと言えよう．

Ⅱ．「同情」のメカニズム

階級を越えて人々を包含する共同体を想像する過程には，しかしながら，常に排除が伴う．共同体は，包含される者と排除される者との間に境界線を引くことによって，初めて成立するからである．同情がいかに他者を排除する機能を持ちうるかは，同情のメカニズムを考察することによって明らかになる．ジャッファはヴィクトリア朝の同情を論じるにあたって，アダム・スミスの『道徳感情論』(*The Theory of Moral Sentiments*) の次の一節を引用している．

As we have no immediate experience of what other men feel, we can form no idea of the manner in which they are affected, but by conceiving what we ourselves should feel in the like situation. Though our brother is upon the rack, as long as we ourselves are at our ease, our senses will never inform us of what he suffers. They never did, and never can, carry us beyond our own person, and it is by the imagination only that we can form any conception of what are his

sensations. (11)

ここでスミスは，同情とは，我々が他者の状況に身をおいたときに得る，想像された感覚なのだとしている．われわれは，他者の苦しみを想像によってのみ感じることができる．ジャッファが注目するのは，「同情」が表象，特に視覚的表象と切り離すことができず，それゆえ苦しむ他者は一種のスペクタクルであるという点である．「同情的な反応は主にわれわれが見るものによって支配される．…視覚はシステム全体を決定するのに必須のものなのである」(De Bolla, qtd. in Jaffe 10).

スペクタクルとしての苦しむ他者が，見る者の内に呼び覚ますのは，憐れみの感情だけではない．スミスは次のようにも述べている．

> Persons of delicate fibres and a weak constitution of body complain, that in looking on the sores and ulcers which are exposed by beggars in the streets, they are apt to feel an itching or uneasy sensation in the correspondent part of their own bodies. The horror which they conceive at the misery of those wretches affects that particular part in themselves more than any other; because that horror arises from conceiving what they themselves would suffer, if they really were the wretches whom they are looking upon, and if that particular part in themselves was actually affected in the same miserable manner.
>
> (12)

同情は，苦しむ他者が与える視覚的影響力に拠っている．しかし，もしその影響力が強すぎれば，皮肉なことに苦しむ他者への憐れみの感情は嫌悪に変わりうる．ここで物乞いの病んだ身体を見る者は，自分自身の身体に「不愉快な感覚」を覚え，「恐怖」を感じる．このとき，見る者の意識は，喜びや悲しみといった精神を内包する総体としての物乞いの身体ではなく，その身

体の病んだ一部分に集中している．見る者が物乞いと共に感じているのは，彼の内面の苦しみではなく，肉体的な痛みなのだ．見る者の眼差しは，物乞いの強烈な肉体的存在感に阻まれて，その内面にまで届くことができないのである．

見る者はそれゆえ，同情の感情を保つには，苦しむ他者の肉体的な存在から一定の距離を置かなくてはならない．遊歩者ハンフリーが夜の遊歩を好むのは，群集を観察しつつも，群集との距離を保つためである．「昼日中のぎらぎらとした光と喧騒は，私の怠惰な営みには向いていない．街路や店の明かりで，通り過ぎる顔を一瞬一瞥することのほうが，昼の光で完全にあらわになるよりは，私の目的にかなっているのである」(3) と彼は語る．「夜はより優しい」(3) とも彼は言う．夜の暗がりは，群集の圧倒するような肉体的存在感から彼を遠ざける．彼の群集との同情で結ばれた関係は，見る必要性と，見ない必要性との危ういバランスの上に成り立っているのだ．

ネルとクウィルプの分析では，同情という感情をめぐる，この微妙なバランスが鍵となる．ネルを描くにあたって，ディケンズは読者の同情を喚起するために，ネルをスペクタクルとして呈示しながらも，彼女の肉体性を過度に強調しない．ネルの描写は肉体を持つ人間と，肉体を持たない霊的な存在とのあいだで揺れ動くが，そのことによって，彼女の死は読者の心に大きな同情の念を引き起こし，社会の中で虐げられた多くの弱者への憐れみをも呼び覚ました．一方クウィルプは，徹頭徹尾その肉体性が強調されることによって，読者の嫌悪と恐怖を掻き立てる．この２人の描写には，ディケンズの貧しき者に対する，相反する意識――あるいは無意識――が反映されているというのが私の仮説である．以下の議論では，この２人の描写を分析し，一体誰がどのように「想像された共同体」に包含され，誰がどのように排除されたのかを検討することによって，ディケンズの複雑な階級意識の一端を明らかにしたい．

Ⅲ．ネル：肉体性の強調と隠蔽

ネルは登場人物の前に，そして読者の前に，スペクタクルとして現れる．それを最も端的に表しているのが，ネルを描いたハブロー・K. ブラウン（Hablot K. Browne）の2枚の挿絵である．1枚はジャーリー夫人の蝋人形館の宣伝ビラを配っているネル（図版1）を，もう1枚はミッドランド工業地帯の彷徨の後，以前出会った親切な学校教師と再びめぐり合い，近くの宿で休息をとっているネル（図版2）を描いている．前者のネルは見世物として，観客の前に立つ．ビラを受け取ろうと手を伸ばしている1人の人物が，ヴィクトリア朝ではしばしば見世物としてさらされた黒人の少年であることが，この場面のアイロニーを強調している．後者の挿絵のネルは，字義通りの見世物ではない．しかし，周囲の人々の視線は前者の挿絵と同じく，ネルに注がれている．「皆は自分のお気に入りの薬を口々に叫ぶが，誰も持ってこなかった．皆はもっと空気をと叫びながら，同情の対象の周りに群がるこ

（図版1）Producing a Sensation

（図版２）Nell in a Faint

とで，そこにあった空気までも念入りに締め出していた」(345)．人々はネルに同情しながらも，彼女の苦しみを和らげるべく行動をおこすことはなく，むしろその苦しみの姿に魅入られている．スペクタクルとしての彼女は肉体を持った人間でなくてはならない．批評家はしばしば，天使としてのネルの霊的な一面を強調してきた．ネルが肉体的な欲求を持った子供としてよりも，肉体を持たない天使のような存在として描かれていることは，否定しようもない．だがそれと同時にディケンズは，彼女を生身の人間として描き，彼女の試練をスペクタクルとして読者に呈示している．肉体を有するネルと，有しないネルの両方を描きながら，ディケンズは彼女への同情を最大限に高めているのである．

マイケル・シーフェルベイン（Michael Schiefelbein）は，ディケンズがネルのまわりに，肉体的欲求に駆られ，ネルを欲望の対象として見る登場人物を配置することで，読者の注意を彼女の肉体性に向けていると論じている

(25)．例えば，ハンフリーが彼女を「あんなにも幼く，霊的で，繊細で，天使のような子」(19) として描写しているのに対して，クウィルプは彼女の肉体的な魅力に引かれる．「ぽちゃぽちゃして，ばら色で，温かな小さいネル！…あんなにも小さくて，あんなにも引き締まっていて，あんなにも美しい体型で，あんなにも色白で，あんな青い血管と透明な肌と，あんなに小さな足」(80) というクウィルプの言葉は，ハンフリーの語りが隠していたネルの性的な魅力を，読者に明らかにする．ジャーリー夫人もまたネルの肉体的魅力に気づく人物である．旅の途上のネルと初めて出会ったとき，ジャーリー夫人は次のように声をかける．

> "Come nearer, nearer still"— said she, beckoning to her to ascend the steps. "Are you hungry, child?"
>
> "Not very, but we are tired, and it's — it *is* a long way" —
>
> "Well, hungry or not, you had better have some tea," rejoined her new acquaintance. (202)

ネルの禁欲的な否定にも関わらず，快楽的なジャーリー夫人は，一日中徒歩で旅をした子供の肉体的な欲求が何であるかを知っている．夫人はネルと祖父に食べ物を与え，「残さないように」(202) と命じ，ネルたちは「たっぷりの食事を取って心ゆくまで楽しんだ」(202) のである．ネルの肉体的欲求を感じ取る夫人は，彼女の肉体的魅力にも敏感である．夫人はネルを蝋人形館の案内役とすることで，その魅力の商業的価値を最大限に引き出すことに成功するが，同時に読者もまた，彼女を見つめる観客として，彼女の身体の美に気づくのだ．

蝋人形館の観客の前で，花に飾られ見世物として展示されるネルの身体によって，読者が彼女の肉体的魅力に気づくとするなら，風雨にさらされて傷つき疲れきった同じ彼女の身体によって，読者の同情は掻き立てられるはず

である．しかし，スミスの分析した同情のメカニズムによれば，苦しむ他者の過度の肉体的な存在感は，見る者に嫌悪の情を引き起こす可能性もある．ディケンズは，ネルの最大の試練とも言うべきミッドランドの工場地帯の彷徨と，その後の死に至る場面において，彼女の肉体と内面の精神の両方を，微妙なバランスを保ちつつ描いている．ディケンズがまず強調するのは，飢えや寒さといったネルの肉体的苦痛よりはむしろ，人々の無関心の中での疎外感という彼女の精神的苦痛である．ウォルバーハンプトンと思われる街にたどり着いたとき，ネルと祖父は街路の片隅にただずんで，通りを行きかう人々の流れを見る．「ある者はしかめ面をし，ある者は微笑み，ある者は独り言をつぶやいている．…そこに静かに立って，通り過ぎていく人々の顔を見ることは，まるでそれらすべての人々の秘密を知ることのようだった」(330)．ここでのネルは，他者の内面に入り込む遊歩者ハンフリーのような同情的な眼差しを有する，見る主体である．しかし彼女が見つめる群集の中に，彼女の同情的な眼差しに気づき，それに応えてくれる者はいない．「行きかう人々のなかに，彼らに気がついた様子の人も，彼女が勇気を出して声をかけてみようという人もいなかった」(330)．都市の群集を支配するのは，無関心であり，「山のような悲惨さのなかにあって，彼らは微塵に過ぎない」(330) のである．だがディケンズはある決定的な瞬間において，読者の注意を，彼女の肉体の苦しみに対して喚起している．飢えと寒さに耐えかねた祖父が，なぜこんなところに連れてきたのかとネルを責めたとき，彼女は次のように言う．

> "Dear grandfather, you are old and weak, I know; but look at me. I never will complain if you will not, but I have some suffering indeed."
>
> "Ah! Poor, houseless, wandering, motherless child!" cried the old man, clasping his hands and gazing as if for the first time upon her

anxious face, her travel-stained dress, and bruised and swollen feet; "has all my agony of care brought her to this at last!" (331)

「私を見て」――この言葉によって，ネルは自らの身体をスペクタクルとして，祖父に，そして読者に，呈示している．祖父と読者ははじめて，「彼女の不安げな顔，旅で汚れた服，傷つき腫れ上がった足」に気づく．これはディケンズが唯一，ネルの傷ついた身体を描写した場面であり，これ以外の場面では，彼女の死に至る過程を，肉体的な消耗ではなく，魂の救済にいたる遍歴として描いている．マルコム・アンドリュース（Malcolm Andrews）が指摘するように，彼女の死の場面では，肉体的なリアリティは全く失われている（29）．ベッドに横たわる彼女の遺体は，肉体的な苦痛の痕跡を何もとどめてはいない．

She was dead. No sleep so beautiful and calm, so free from trace of pain, so fair to look upon. She seemed a creature fresh from the hand of God, and waiting for the breath of life; not one who had lived and suffered death. (537)

これこそが，同時代の読者たちが，すべてを包み込むような同情でひとつになって，嘆き悲しんだ死であった．そしてこの「国民的な悲しみ」は，半ば肉体的で，半ば肉体性を喪失した霊的なヒロインによって巻き起こされたのであった．

Ⅳ．クウィルプ：精神性を否定された身体

ネルの描写において，肉体性があるときは強調され，またあるときは巧みに隠蔽されているのに対して，クウィルプの描写においては，その肉体性のみが徹底的に強調される．物語の始めでハンフリーは，ネルについては「かわいい小さな女の子」（9）としか語っていないのに対し，クウィルプに関し

ては，その身体の特徴を細部にわたって説明する．彼は「初老の男で，目だって険しい顔立ちで，近寄りがたい様子をしている．そして背は小人といっていいくらいに低かったが，頭と顔は身体のわりには，巨人といっていいくらい大きかった」(27)．この文に続いて，口，あご，あごひげ，顔色，歯，首と，彼のグロテスクな身体が描写される．ハンフリーの眼差しは，「口の中にまばらに生えた二，三本の色あせた牙」や「曲がった，長い，黄色の指爪」(27) など，クウィルプの身体のいかなる特徴も見逃すことはないので，クウィルプは圧倒的な肉体的存在感を持つことになる．また彼の描写には，アフリカ人の酋長，野蛮人，中国の偶像といった多人種のイメージや，犬，猿，山猫といった動物のイメージ，そして悪魔，小人，怪物，人食い鬼といった魔物のイメージが多用され，これらによって，彼の「正常」からの逸脱が示唆される．彼の身体は，他者性を視覚的に印象付ける最も効果的な媒体として，読者に呈示されているのである．

クウィルプは見られる客体であり，ディケンズは喜びや悲しみといった彼の内面の精神を描こうとはしない．彼の身体は，キットの「一ペニーで見られるどの小人よりも醜い」(53) という言葉が示すように，読者にとってある種の「見世物」として現れる．彼の脅威に絶えず脅かされることになるネルでさえ，最初は彼のグロテスクな身体に，見世物を見るときのような好奇心を感じている．「彼女はこの小男に恐怖と不信を抱きつつも，彼の不恰好な様子とグロテスクな姿勢にもう少しで笑い出しそうになった」(50)．彼は精神性を有することを否定されているため，その身体は好奇や嫌悪の対象となっても，同情の対象となることはない．この点において彼は，字義通り見世物として観客の好奇の目にさらされる，旅芸人の巨人や小人と等しい．次の一節は，宿の主人と旅芸人一座の座長，ヴァフィンとの会話である．

> "What about the dwarfs, when *they* get old?" inquired the landlord.
> "The older a dwarf is, the better worth he is," returned Mr. Vuffin;

"a grey-headed dwarf, well wrinkled, is beyond all suspicion. But a giant weak in the legs and not standing upright! — keep him in the carawan, but never show him, never show him, for any persuasion that can be offered." (150)

この会話のグロテスクさは，ホリントンも指摘するように，精神を内包することを否定された身体が，ただの物質的な商品として扱われているという点にある（*Dickens and the Grotesque* 87）．遊歩者の「見る」という行為は，個の内面に入り込むことによってはじめて，同情の眼差しに変化する．好奇の対象としての巨人や小人の身体は，内面を持たない肉体であり，それゆえ観客の同情は生まれ得ない．

精神性を持たない身体としてのクウィルプ，小人，巨人は，ヴィクトリア朝において商品化されたもう一つの人々の集団——労働者階級——と結びついている．ウォルバーハンプトンの溶鉱炉の描写で，彼らは，「悪魔のように炎と煙の中を動き回り」(333)，「巨人のように働く」(333) といった，精神性を否定された身体のグロテスクなイメージを使って描写されている．クウィルプと下層階級をこのように結びつけるのはやや強引な理論かもしれない．けれども当時の読者はすでに，そのつながりを意識していた．『骨董店』の連載がまだ進行中の 1840 年 11 月 7 日に，『アシニーアム』(*Athenaeum*) に掲載された批評で，トマス・フッド (Thomas Hood) は「世の中の半分の人々は，残りの半分がどんなふうに生きているのかを知らない．ボズはその無知を本質的に啓蒙する手助けをしてくれた．…われわれ個人の経験からは程遠いかもしれないが，アルモンリィやラッツ・キャッスルのような場所があるのと同じくらい確かに，クウィルプのような人々は，人間の貧民窟やスラムにいるのかもしれない」(888) と述べている．ヴィクトリア朝の貧民はしばしば，動物や異人種の侮蔑的なイメージを使って表象され，中産階級の筆者や読者の同胞意識の枠外に存在する他者として捉えられてきた．フッ

ドがクウィルプとそのような人々とのあいだにつながりを認めたとしても，不思議なことではない．

ネルの死が魂の救済として描かれ，肉体的なリアリティが失われているのに対して，クウィルプのテムズ川での溺死という最期は，肉体の崩壊として描かれていている．

> [The water] toyed and sported with its ghastly freight, now bruising it against the slimy piles, now hiding it in mud or long rank grass, now dragging it heavily over rough stones and gravel . . . until, tired of the ugly plaything, it flung it on a swamp — a dismal place where pirates had swung in chains, through many a wintry night — and left it there to bleach. (510)

ここでは精神性を否定されたクウィルプの身体が，物質――単なる "it"――として崩壊していく過程が，冷徹な眼差しで観察する語り手によって，ひとつひとつ詳細に描かれている．ネルの死とは対照的に，クウィルプの死は物理的な肉体が破壊されていく過程に過ぎないのである．

結び

ディケンズはその生涯を通して，社会の貧しき者や見捨てられた者への同情を失うことはなかったし，小説や雑誌記事において，常に彼らに対する同情を，読者に喚起することも忘れなかった．「社会に対して行なうあらゆる攻撃において，ディケンズはいつも構造の変化よりは精神の変化を強調しているように思える」(22) とは，ジョージ・オーウェル (George Orwell) のあまりにも有名な批評であるが，同情という感情は，ディケンズにとってまさに社会改革の根幹をなすものであった．しかし，貧しき者たちへの彼の眼差しには，憐れみと同時に好奇や嫌悪，恐怖の念が入り混じっていたのも，また事実である．ディケンズはロンドンの貧民窟をしばしば訪れ，その体験

にもとづいた雑誌記事を書いているが，その中で彼らは，例えば「チーズの蛆虫」，「ねずみ」，「害虫」（"On Duty" 362, 364）といった言葉で表現されていることがある．こうした言葉で貧しい者たちが描写されるとき，彼らは観察者ディケンズにとって，また読者にとって，同情の対象から好奇と嫌悪の対象へと変化する．遊歩者は個の内面に入り込むことで，階級の壁を越え，すべてを包含する同情を生み出すが，彼の眼差しが個の外面にとどまり，その内面性を否定するなら，その個を同情の輪から排除することになるのだ．

『骨董店』の物語の後，ハンフリーはセント・ポールの時計の鐘の音に，「通り過ぎる者のなかの最も卑しい者にも思いを向けるよう，人間の形を持つ誰からも，侮蔑と高慢で目をそむけることがないように」（*Master Humphrey's Clock* 109）と命ずる声を聞く．万人への同情を呼びかけるハンフリーの内なる声も，穿った見方をすれば，「人間の形」を持たない者への排除の声と解釈することができる．少なくともクウィルプは，「人間の形」を持たない者として，同情の対象から排除されていた．ネルとクウィルプの描写には，こうした同情をめぐる包含と排除のポリティックスを読み取ることができるのである．

引用文献

Andrews, Malcolm. "Introduction." *The Old Curiosity Shop*. Harmondsworth: Penguin, 1972. 11-31.

Benjamin, Walter. *Illuminations*. 1973. Ed. Hannah Arendt. Trans. Harry Zohn. London: Fontana, 1992.

Collins, Philip, ed. *Dickens: The Critical Heritage*. London: Routledge, 1971.

Dickens, Charles. "On Duty with Inspector Field." *The Amusements of the People and Other Papers: Reports, Essays and Reviews 1834-51*. London: J. M. Dent, 1996. 356-69. Vol. 2 of *Dickens' Journalism*. Ed. Michael Slater. 4 vols. 1994-2000.

—. *Master Humphrey's Clock*. 1840-41. *Master Humphrey's Clock and A Child's History of England*. Oxford: Oxford UP, 1958.

—. *The Old Curiosity Shop*. 1840-41. Oxford: Oxford UP, 1998.

[Felton, Cornelius C.] "*American Notes for General Circulation*." *The North American Review* 56 (1843): 212-37.

Hollington, Michael. "Dickens the Flâneur." *The Dickensian* 77 (1981): 71-87.

—. *Dickens and the Grotesque*. London: Croom, 1984.

[Hood, Thomas.] "*Master Humphrey's Clock*, Vol. 1." *Athenaeum* 7 Nov. 1840: 887-88.

Jaffe, Audrey. *Scenes of Sympathy: Identity and Representation in Victorian Fiction*. Ithaca: Cornell UP, 2000.

Morris, Pam. *Imagining Inclusive Society in 19th-Century Novels: The Code of Sincerity in the Public Sphere*. Baltimore: John Hopkins UP, 2004.

Orwell, George. *Dickens, Dali & Others*. New York: Reynal, 1946.

P[eabody], A. P. "Philosophy of Fiction." *The Christian Examiner* 32 (1842): 1-19.

Schiefelbein, Michael. "Bringing to Earth the 'Good Angel of the Race.'" *Victorian Newsletter* 84 (1993): 25-28.

Schlicke, Pricilla, and Paul Schlicke. *The Old Curiosity Shop: An Annotated Bibliography*. New York: Garland, 1988.

Smith, Adam. *The Theory of Moral Sentiments*. 1759. Ed. Knud Haakonssen. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

Sucksmith, Harvey Peter. *The Narrative Art of Charles Dickens: The Rhetoric of Sympathy and Irony in His Novels*. Oxford: Clarendon, 1970.